

丸山定巳教授を送る

田 口 宏 昭

丸山定巳教授は1968年4月、熊本大学法文学部助手として赴任されました。その在任期間は35年を超え、この間の熊本大学の歩みに精通しておられる生き字引的存在です。その長い歩みのなかで特に記憶に残ることがあります。私が教養部に赴任し、文学部の授業も担当していたこともあって文学部の倫理学Bコース(社会学)の「進級生」の歓迎会に参加した折のことでした。歓迎会が宴だけなわとなり、学生の間から「丸山先生、唄を」との声がかかりました。当時30歳なかばの丸山先生はおもむろに立ち上がり、この「刈干し切り唄」を朗々と歌い始められました。

少し後のことですが、この歌の背景を想像させる広大な原野が阿蘇にあることを知りました。秋の陽を浴びながら冬場の牛の飼料となる草を悠悠と刈る人々の姿が点景としてふさわしい雄大なこの光景を見るたびに、悠久のときが流れるともなく流れ、人の心をまるで別次元の世界へ誘い込むような「刈干し切り唄」が妙に懐かしく感じられます。

土地は人をはぐくむ、という言い方があります。丸山先生は宮崎県の飫肥の生まれですが、その後まもなく本籍地の熊本県八代市に転居され、小学生時代をそこで、さらに中学生時代の大半は熊本市内で過ごされました。後に再び宮崎県に戻り、宮崎市の北方に位置する高鍋町で大学進学までの時期を過ごされました。宮崎の県民性はのんびりとしていて小事にこだわらないところが特徴だといわれますが、その気性は「刈り干し切り唄」の雰囲気と相通じるところがあるように感じられます。

カラオケ時代に入って丸山先生の歌のレパートリーは広がりましたが、かつては「刈干し切り唄」が数少ない歌のレパートリーの筆頭曲でした。カラオケ時代の昨今は、残念ながらめったにこの唄を耳にすることができなくなつたのは残念なことです。今まさに効率や迅速さが万人に要求される、何とも慌しい時代となりました。このような時代には、もしかすると丸山先生を除

けば、悠長なこの唄を朗々と歌える人がもはや居られないのでないでしょうか。

この唄を先生がかつて愛唱されたことと、その生き方や学問に対するその姿勢、あるいは学生と向き合うその姿勢とのあいだには相通するところがあるように思われます。若いころから、流行に振り回されず、一つのことを儘まず弛まずやり続けるという原則を、学問研究の世界で貫いてこられました。先生の研究生活の出発点となったのは都市社会学であり、特にスラムや貧困などの都市問題が当初の焦点でした。その後、都市的生活様式と農村的生活様式とが現実の人びとの生活のなかで相互浸透する現実に即して、両者を包括する地域社会学が成立してきます。先生は地域社会学の教育研究を進めるかたわら、研究を社会に還元することにも関心を注ぎ、地域政策づくりにも参画され、その意味において、今日呼ばれている大学の地域貢献のさきがけであったと言えるでしょう。

このような包括的な研究領域としての地域社会学とともに、当時からすでに大きな社会問題となっていた水俣病の社会学的研究が先生の研究のもう一方の柱でした。これらは研究生活を通して変わらぬものとなりました。後者はさらに、ずっと後に社会学の研究領域のひとつとして登場してくる環境社会学の中心的研究テーマの一つとして位置づけられることになりますので、先生の水俣病の社会学的研究は環境社会学の草分け的研究であると言えます。丸山研究室では四半世紀以上ものあいだ、毎月定期的に水俣病研究会が開かれ、その成果は平成8年度の毎日出版文化賞を受賞した水俣病研究会編『水俣病事件資料集』（上、下巻）等々に結実しました。

「刈干し切り唄」の心は教育に対する姿勢にも現れていました。学生を急かさないその教育姿勢は、学生個々人の内部から発酵してくる潜在的能力を誘い出し、忍耐強く待って育てる教育的効果を持っていたように思われます。

このように悠々の生活態度は、平成9年度から11年度にかけて文学部長の任に就かれていた時期においても、丸山先生の変わらぬ持ち味であり続けました。平成16年度から熊本大学も独立行政法人となり、効率優先の時代の渦中に投げ出されることになりました。このような時代には「刈干し切り唄」も悠々の生活態度もあまり歓迎される気配がなさそうです。これらの真価が

再評価されるのは、それらの良さがすっかり見失われ、ストレスによって人々が疲弊してしまう時代になってからかもしれません。